国際貿易における「分断」と「統合」に関する理論的考察

Segmentation and Integration in International Trade: A Theoretical Perspective

椋 寛
学習院大学経済学部

概要

グローバル化の進行は、国家間の「統合」と「分断」を同時にもたらしてきた。関税引き下げを中心とした貿易の自由化や輸送費の低下は、輸入品の流入やそれに伴う価格裁定活動の活発化等を通じて、異なる国の市場を「統合」(Integration) させる効果がある。一方で、保護主義的な貿易政策の発動や、自然災害や感染症の拡大といったショックは、国家間の市場を「分断」(Segmentation) してしまい、様々な悪影響をもたらしてしまう。しかし保護貿易政策のなかでも、例えばアンチダンピング措置は、輸出企業に国境を越えた同一価格の設定を強いるという意味で、異なる市場を政策的に統合させる面もある。さらに、財部門の自由化が進む一方で関連するサービス部門では高い参入障壁が残ったり、一部の国のみで特恵貿易協定を締結し他の国を除外したりするなど、「統合」と「分断」が併存する「部分的統合」(Partial Integration) も多く観察される。これまで、こうした国際貿易における分断と統合とその影響に関して、様々な視点から理論的研究が行われてきた。

本稿では、筆者のこれまで研究成果から得られた知見を中心に、国際貿易における「分断」と「統合」をもたらす要因、およびその影響に関して多様な視点から整理する。また、筆者が近年取り組んでいる、企業レベルでの（部分的）統合の一形態である「国境を越えた部分的相互株式持ち合い（Partial Cross-Ownership) が市場競争に与える影響」、および政策レベルでの（部分的）統合の一形態である「自由貿易協定の締結における除外品目の影響」に関する理論研究について、それぞれ紹介する。